

休憩室のテレビには昼のニュースバラエティ番組が流れていた。インド洋沖で貨物船とタンカーが衝突して座礁、勢いよく炎を上げるタンカーの様子が映し出されていた。テレビの真ん前の席でその映像をぼんやり眺めていた西川貴志は今開いた弁当に調味料が付いていないことを思い出した。弁当を手にも席を立った。

入口の扉の内側に沿って置かれた低い台に割り箸や調味料類、電気ポットや電子レンジ、台拭きなどがのっっていた。

ソースの容器を取り、ミニヒレカツの上にかけた。イカフライにもかけた。この商品、海苔弁当デラックスはボリュウム満点なのに三五〇円はたしかに魅力だが、調味料の付いてないのが唯一の難点だった。

ちくわの磯部揚げにかけるため醤油の容器を取った。傾けたが出てこなかった。詰まっている注ぎ口を開けるため爪楊枝を探したが、いつもはあるはずの丸い爪楊枝入れが見当たらなかった。貴志は振り向いて室内を見渡し、狭い空間をさらに狭苦しく埋めるテーブル上を一つ一つ目でたどっていった。

地域密着型スーパー『ニコニコマーケット』の従業員用休憩室は奥に細長く、そこに二人掛けの小テーブルが縦横バラバラに、あるいは二つを付けて四人掛けにするなど迷路を描くように雑然と配置されていた。夕方四時で帰る掃除の小母さんが帰りがけにきちんと並べ直していくのだが、交代で取る休憩時間の始まる十一時半にはみるみる崩れていくのだった。

すべてのテーブルが埋まっていた。座っているのはほとんどが女性で、混じりあった声が甲高いひとつの大声になって、ときどき机やイスが震えるのもそのせいには思えた。実際には頭の上を電車が通るからだ。私鉄電車の高架下にこのスーパー、といってもコンビニ二つ分位の大きさの店舗はあった。

結局爪楊枝は見つからなかった。あきらめて席にもどった。同じテーブルの隣では青果部の瘦せた女性が覆い被さるように自前の弁当すれすれに顔を寄せて食べていた。貴志が座ると箸を止め、彼の方に軽く会釈するとまた小鳥がついばむような小刻みな咀嚼にもどった。さっき入ってきて「隣いいですか？」と貴志が声をかけた時も同じように会釈していた。貴志と同様、いつも一人で食事する姿を見かけるが、惣菜部の貴志とは仕事上の関りもなく話したことはなかった。

おそらくはひと回り年上のこの女性も、スタッフ内では若い世代に属した。従業員のほとんどは五十代から六十代で、数少ない男性は留学生など逆に若年層に偏っていた。

とはいえ貴志自身はそれほど若いといえる年齢ではなかった。どれ位だっただろう、高校を中退してから。ざっと計算して十年以上。その年月は彼にとって、長い長い時間だった。どれほど長い一年一年、一日一日、一時間一時間、一分一分、一秒一秒……。それを計っていたのは作業の手を止めないまま休憩まであと何分と見上げる、工場や倉庫の壁の上の時計の針なのだ。だから、進まないのは当然だが。

ほんやりと視界は薄茶色に染まっていた。それがだんだんはつきりしてきた。盛り合わせたフライがそれぞれ衣の形を具え始めた。貴志は箸を割った。

テレビではシリアスなニュースの時間帯を過ぎ、世界中の可愛らしい動物のトピックを集めたコーナーだった。氷の割れ目から顔をのぞかせたゴマフアザラの赤ちゃんがつぶらな目を開けたり閉じたりしていた。

ふと横を見ると、青果部の女性がウインナーを挟んだ箸を止めたまま、潤んだ目で画面を見上げていた。小刻みに動くこけた頬にうっすら微笑みが浮かんでいた。

画面の右上ではワイプの中で、ティーンに人気の女性タレントが手を叩きあふれる笑顔で何か喋っていた。その声を聞き取ろうとして、画面に顔をやや近づけた。

「何から何まで、まともによれたためしなし、マジでなし」

それほど大きな声じゃないのに、はっきり聞こえた。テレビからではなく、部屋の背後の奥のほうから。

貴志は首を九十度後ろに回しかけ、またゆっくりもとにもどした。あえて振り向かなくても、さっきまですぐそばで聞いていた声だった。だからこんなにも肌にヒリヒリ刺さる喧噪の中でも、しっかりと耳まで届いたにちがいない。

目の前の海苔弁当に集中することにした。

唐揚げを一口食べてみた。さっき彼自身が揚げたものだ。我ながらいい出来だと思った。噛みしめているとジワジワ良い香りの肉汁が染み出し、心地よい弾力が奥歯にはね返ってくる。いつまでも噛みしめていたい。すてきなクッション。子供のころ、就寝前よく掛け布団の端を噛んで母に叱られたことが思い出された。

「十を聞いて一覚えているかどうか、自覚してみたことあるのかね。いや、ないな」

さっきとはまた別の、けれどやはり聞きなれた声が背後からした。口の中でだんだん鶏肉が固くそっけない表情を湛えはじめる。シューシューなも肉のはずが、いつしかパサパサした胸肉へ。

凍った胸肉の塊がピタピタ胸に押し当てられる気がする。昨日の失敗のせいだ。

昨日使うはずのチキン南蛮用の冷凍胸肉を、前の日に冷凍庫から出し忘れていたのだった。あわてて当日の朝冷水解凍したが巨大な塊はびくともせず、主任の宮崎さんの許可をえて、お湯で解凍したのだった。

油で揚げたあと、一切れずつ皆で試食したが、肉汁とともに衣に付いている当店自慢の秘伝の下味までが抜け出し、とても店頭に並べられない。人気商品なのに、昨日は欠品にしまった。

「フツツの顔して生きてられるのが不思議。ある意味うらやましい」
 第三の声。貴志よりあとに入って、年もずっと若いフリーターの女の子の声だった。化粧気のない丸い頬を赤くして、黒縁メガネに囲まれた細い目でそう言ってるのが見なくても見えた。

噛んでいた鶏肉を呑み込んだが、喉のすぐ下で止まった。ペットボトルのお茶で流し込んだ。胃に小石を投げ込んだようだった。喉ごしのソフトなほうれん草のおひたしに箸を伸ばした。うまくすぐえず、箸の上に乗ってはこぼれた。

「聞いてんのかよ！ 飯食ってる場合か！」
 反射的に弁当にフタをしていた。エコバッグに入れ、立ち上がった。

出口へと向かう左右の景色がグラグラ揺れていた。左手にジュースの自動販売機が歪んだ姿で立っていた。テーブルにお茶を忘れたことに気づいた。引き返す勇氣はなかった。

休憩室を出ると、そこはトラックの出入りする商品搬入口だった。染みだらけの鼠色のコンクリートに囲まれ、薄暗く天井の高い、ゆるい坂道になった空間に、警備員がひとりポツンと立っていた。

小柄な体に活気のある老人は話し好きで、従業員が通るたびに話しかけ、貴志にもよく声をかけてくれた。水色の制服の前でオレンジの誘導棒を振り振り、白い眉を八の字にして笑顔で近づいてきた。貴志はあいまいに笑い返すと、背を向け駐車用のスロープを下り、通用口を出ていった。

交差点の横断歩道を二回渡り、スーパーからみて斜め前のプロックに着くと広い駐車場だった。精算機の裏に自動販売機があり、両方の頭上にかけて縞模様ビニールで屋根が張ってあった。

弁当を食べ終えた休憩時間の残りはいよいよ付近の自販機の横で過ごすのが日課だった。とくに雨の日にはこの場所を愛用していた。四十五分の休憩のうち、ふだんはあと十五〜二十分位なのに、携帯をみるとまだ三十分以上残っていた。

貴志は糖分多めの缶コーヒーを買い、フタを開けて飲むと精算機の上に置いた。

十一月とは思えないポカポカ陽気で、駐めである車のフロントガラスやボンネットに陽射しが降り注ぎキラキラ反射していた。貴志

はエプロンの下のトレーナーの袖を捲った。
 深呼吸した。精算機の上から缶を取り冷たいコーヒを飲み干した。

やや落ち着きをとりもどすと、何の驚きもしていない自分に気づいた。むしろこんな日が来るのを待っていた気がした。

今までにもミスを犯した時はすぐさま宮崎主任の怒号が飛び、それまで元気な声掛けの応酬で流れるような連係プレーをみせていた現場の空気が一気に冷え込み、ポツポツと失笑やひそひそ話の洩れる陰湿な風土を垣間見せることはしばしばあった。

それに連係プレーといっても快活な言葉のパスをつないでいるのは貴志以外のスタッフ間で、貴志にはついぞボールは回ってこないのだった。

誰よりもミスが多いのは認めるしかないが他のスタッフにもたまにミスはあるし、そんな時宮崎主任は笑って見過ごし、貴志の時にだけ罵声を浴びせるのだった。ミスが人一倍多いといってもまだ二た月足らずなのだから育てるつもりで温かく見守ってくれてもいいはずだ。

だんだん腹が立ってきた。自分なりに努力もしているのだ。

エプロンのポケットからメモ帳を取り出して開いた。主任の宮崎さんに言われて、調理にあたって覚えておくべきことや注意すべき点を黒ペンで、赤ペンで自分のミスをそのつと記入する習慣だった。

赤い文字を拾ってみると、

◎ギョーザの皮だけ鉄板に残る↓コテは鋭角的にそっと差し込む
 ◎揚げ物の衣ぐったりする↓トレイのフタは十分冷めてから閉める

◎お好み焼きの生地が固いとお客様の声↓上から押さえない

◎唐揚げと竜田揚げまちがえる↓色で見分ける

◎焼き鳥のバラ売りが店頭から消える↓ひんばんに売り場に出て、
 なくなっていないかカクニン

◎値札シール昨日の日付のまま↓朝来たらまず今日の日付入力

◎値引きシール貼るの早すぎ↓客にたのまれても時間厳守

：：：：：：：

「書いてるだけで満足してるんじゃない？」

といわれたこともある。だが最初のほうのページはもう体で覚えたといえるほどクリアしてるのだから、そこを評価せずそんなことをいわれるのは心外だった。

永いアルバイト歴の中でもスーパーは初めてだった。工場や倉庫の密閉された空間で機械の動きに振り回され重い荷物に体力をすり減らすうち、小売業や接客業など「お客様の顔がみえる」職種が年々色鮮やかに輝き出した。まずはスーパー。その中でも商品を並べる

のが主な青果やグロッサリーでなく、惣菜部を選んだのはものづくりの難しさと喜びという、これも初めての経験に体当たりしたいという意欲だった。が……。

やはり向いていないのかもしれない。しんしんと降り積もるような哀しみがゆっくりり身体を内側から冷やした。

携帯を見ると、休憩時間はあと十五分弱だった。トイレに行くことを計算に入れると、そろそろもどる時刻だった。

握りしめていた缶コーヒーを空き缶入れに入れ、貴志は歩き出した。

四回目だった。缶コーヒーも四本目だった。

信号は青になり「故郷の空」のメロディが流れた。「今度こそ」と白い線の上に右足を伸ばした。またもどした。背を返し、逃げ込むようにサッと自販機の裏に回った。

さっきは縮んで身を寄せ合っていた自販機と精算機とその上のテナントの影が地面に拡がり、後を追っていた貴志の影も仲間入りした。

携帯を開こうとして、やめた。休憩時間は一時間以上過ぎてはすだだった。マナーモードにしていたが決して震えることなく、さっきからずっと不気味に動かぬままだった。

目のくらむ思いで、携帯を開いた。電話帳を開き店の番号に合わせ、発信ボタンを押した。すぐに切った。携帯を閉じた。しばらくしてまた開いた。

カラスが大勢で鳴いていた。空を見ると、今頭の上で鳴いていたのに、もうずっと遠くを飛んでいた。薄暗くなった空にきれいな細いV字を描いて、角度を変えながら小さくなり吸い込まれるように夕焼雲の下で点になって消えた。

そういえば飛んでる鳥をじっくり見るのは久しぶりだった。いつ以来だろう？ 小学生の時までさかのぼる気がする。あの頃は飽きずらいつまでも眺めていられた。たとえばハトなどがあわてたように何度か飛ばたいたあと、急にピタッと羽根を体に付けじっとしたまま飛んでいられるのが不思議でならなかった。先生に報告したところ、

「いいところに気がついたね」

自販機やテナントの影はすっかり暗くなった駐車場の中でもう地面に埋没していた。そのかわり光りはじめた街灯の下に細長い影がくつきり刻まれていた。

十一月特有の冷たい風だった。昼間とは打って変わった

前の歩道を通り過ぎる人が多くなった。小学生や中学生も混じっていた。何人かがチラチラ、何人かがジロジロ貴志のほうを見た。スーパールの縞模様のエプロンを着けたままだったことに気がついた。

部屋に帰ると、テレビを点けた。いつもより早い時刻で、チャンネルを変えともう一度見たかったドラマの再放送が映った。イスに座り背筋をピンとイスの背に付け、両手をひざの上に置いて見た。その姿勢のままほとんど動かさず、視線もテレビの画面に釘付けだった。

ドラマはすぐに終わった。ほぼフルタイムで見たはずなのに、何も覚えていなかった。五時からのニュースが始まった。ニュースもまた何一つ頭に入って来なかった。

六時になったので普段どおり夕食を取ることにした。昼間食べ残した弁当を、顔を背けるようにしてエコバッグから出した。ゴミ箱の上空まで移動し、迷ったあと冷蔵庫にしまった。かわりにレトルトのおかずを出した。戸棚からレトルトのご飯を出した。どちらもレンジでチンした。

さあ食べようと皿に近づけた箸がひとりでに止まった。きのこハンバーグと向き合ったまま、何秒かたった。腕が疲れてきた。箸を持つ手をテーブルの上に置いた。

さっきまで湯気を立てていたご飯もおかずもすっかり冷め切っていた。もう一度チンした。それもやがて冷めていった。一つずつラップをかけ、冷蔵庫にしまった。

夜になってアパートの周りの物音もまばらになり、辺りがシーンとしはじめると、耳には聞こえない何かがだんだん押しよせてくるようだった。

それをかき消すようにテレビやラジオを点けてもすぐに消してしまふ。自分の言いたいことだけを一方的にしゃべりまくる相手みたいに、場違いのにぎわいを重ねるだけだからだ。

ハンガーに吊していた店のエプロンのポケットから携帯を抜き出した。接着剤で貼り付いた両面を引きはがすみたいに、大変な時間をかけて二つ折りの本体を開き、電源をONにした。

一つ一つ、次から次へ、同じ番号からの着信のお知らせが画面に届いた。

電話マークの右下に「⑧」が入った。うち一件は留守電だった。右手の親指は削除と再生の間をさまよい、どちらもやめた。

狭い部屋の中を歩き回った。床の下から怒鳴り声が出た。知らず知らず足音が激しくなっていた。床の下から怒鳴り声が出た。知らず

とにかく誰かに相談しよう。やっと決心がつき、それでも恐る恐る

る電話帳を開いた。いったん開いてみると今度は迷うことなくア行を選んだ。

『悦男さん』番号が表示された。

貴志にとって悦男さんは母方の叔父だった。叔父といっても四歳しか離れていないから、気持ちの上ではむしろ兄に近かった。そして間違いなく今までの人生の中で最も影響を受けた人物だった。

高校を出てから空調ダクトの仕事ですっと続け結婚もしている悦男さんは仕事の上でも生活面でも、何をたずねても必ず最善の答えを出してくれる、貴志にとって生き字引のような存在だった。

その一方で今日の一件をあの優しくも厳しい悦男さんに報告するのは、貴志には辛い決断だった。ダイヤルボタンに指をのせたまま、貴志はこれから話すべきセリフを必死に練った。

悦男さんの忠告は恐れていたほど厳しいものではなかった。けれど、それを貴志自身が現実に行動に移すことを思うと、それは十分に厳しいものだった。

つまり、彼が予想していたのは、

「今辞めても、またよそで同じ境遇になるだけだよ。人間関係のトラブルなんて、どこへ行っても似たようなものさ。とりあえず、あと一週間がんばってみよう」

あるいは、

「辞めるのは勝手だけど、いきなり辞めたら他のスタッフが困るだろう。ひと月前に辞表を出すこと、その間気まずいけど、がまんしろ、それが社会人としてお前のなすべき最低限の責務だ」

だが彼が聞いたのは、どこか沈んだ、けれど真剣味の伝わる声で、「辞めるしかないだろ。だがな、これは戦いだからな。他の誰でもない、お前自身との戦いだ」

「いいか今から言うべきことを教えてやるからメモしとけよ。」

今日で辞めますが、昨日までの給与の振り込みは間違いなくお願いたします。そして今日までのあなたからの理不尽な仕打ち、それを黙認してきた主任の管理不行き届きについてこの場で謝罪願います。もし不可能なら今から労基に直行しますので。とだいたいこんな感じだ」

「ところで借りたものは一つ残らずその場で返せよ。エプロンとそのポケットの中にあるもの、マジック、軍手、絆創膏、段ボールを開けるカッターなど、ほんのささいなもの、たとえ輪ゴム一本でもきっちり返せよ。それさえ返せばもう借りは何もないんだからな、堂々と大手を振ってお客様用出入口から出ていけ」

翌朝九時の開店と同時にお客様用出入口から事務所を訪れるつも

りで、八時前から支度を始めた。大きなボストンバッグにエプロンその他の備品を入れると、スカスカで軽かった。愛用のリュックに詰めようとして、更衣室のロッカーに入れたままだったのを思い出したからだ。押入れを探してもカバンらしきものは実家から持ってきたこの旅行カバンしかなかった。この緊迫した場面でエコバッグやレシ袋を片手に店を訪れるのは気が引けた。

通用口は六時に開き宮崎主任も七時半には出勤してるからもっと早く行けるものの、なるべく人の出入りの多い開店後のほうが主任とも接しややすい気がした。それに通用門から入って守衛の小父さんに会うのも心苦しかった。

八時四五分になってさあ出かけようとバッグを肩に掛けた時、はたと気づいた。今日は第三土曜日だったことをすっかり忘れていた。毎月その日はニコニコ応援セールで、玉子一パック六八円など破格の大特価市だった。開店前からガラス扉の前には人だかりができ、開くと同時に店長以下主任クラスに従業員が居並び爽やかな笑顔でお客様一人一人に買い物カゴとチラシを手渡しする習わしだった。当然宮崎主任も列に加わっているにちがいない。

午後一番にしよう。それなら目玉商品はほぼ売り切れ、客足も落ち着いているはずだ。

そうと決まったらひと安心、昨夜来フトンに入っても悪夢にうなされほとんど寝付けなかったことも手伝い、机とイスの上で気絶したように突然の眠りに落ちた。

ガバツと机から首を起こした。机の上によだれの池ができていた。ティッシュで拭いた。携帯を見た。いつのまにか三時四七分！そろそろ夕方のピークタイムに向け忙しくなる時刻だ。だが土曜日は四時から学生のバイトが入るはず、宮崎主任はヘルプに回らず事務所にいるはずだ。

けれどよくよく考えてみると、正面から行った場合顔見知りの誰彼に会わなくてはならず、それにまだ一応はスタッフとして在籍してるのだから、やはり通用口から入ったほうがいい。

そうだ、守衛の小父さんが帰る六時過ぎにしよう。

そうと決めたら昨日の昼食以来何も食べてないことを思い出した。急に猛烈な空腹が襲った。

冷蔵庫を開けると、マーガリンしかなかった。冷凍庫から食パンを一枚出し、トースターに差した。

タイマーを回すとシリシリ鳴りはじめた。その音色が微かに変わった気がした。ジャンパーのポケットが内側から光っていた。携帯を取り出すとショートメールが一件とどいていた。開くと悦男さんだった。

大丈夫？ 無事片付いたかい？
 心配だから、今から行くよ
 酒でも飲んで、ゆっくり語ろう
 一時間位で着く

イスから飛び上がった。足元の旅行バッグを肩に掛け、スニーカーのかかとを踏んだまま、部屋を飛び出した。アパートの前の路地に出ると、広い道路めざし古い住宅街を全力疾走した。途中の木造家屋の前にもいつも寝ていて、たまに遊ぶ犬がひと声鳴いて尾を振ってきた。無視した。路地を抜け四車線の道路に出た。信号を待つ間もひとりで足踏みが止まらない。道路越しの斜め前にもう小さく店はみえている。近いからこの職場を選んだのだから当然だ。なかなか青に変わらな。変わってほしいのかこのまま永久に変わってほしくないのか、貴志にもよくわからない。やっと青になった。また走り出し、渡り切ると右に折れ遊歩道になった菱形の石畳の上を一足飛びで駆けつけた。すぐに店の前に来た。立ち止まると急に息苦しくなり、あえぎながら前へ折れそうになる上半身を腰に当てた両手でなんとか支えた。もう迷ってる時間はなかった。だが息が整うまで待たねばならない。額から噴き出した汗をトリーナリーの袖でぬぐった。やっとまっすぐ立てるようになった。店の自動ドアに向けて一歩踏み出す。ガラスドアの前に黄色いゴムの敷物が敷いてある。白抜きで店のキャラクターのニコニコマークがデザインしてある。有名なニコニコマークとよく似ているが目つきがちよっとちがう。それを踏むとドアは自動的に開くはずだ。敷物の端に右足が掛かる。右足を敷物の上空に持ち上げた。踏もうとする直前、ドアが開いた。誰かが出てきた。店のエプロンの裾の部分が見えた。白と黒の縦縞が国旗みたいに風にたなびいている。顔を上げて誰だか確かめることができない。貴志の両足のかかとはクルッと九十度回転し左の方へ、駅の方へと歩き出した。

飛び乗った区間快速の車両の端に貴志は座っていた。さっきから携帯のメール送信画面をにらみながら、一文字一文字書いては消しを繰り返している。悦男さん宛てだった。やっとできた文面はショートメールの文字数制限を超えたため、三回に分けて送った。その一部を抜き書きすると、

昨日誰かが言っていたとおり

十回言われても、私にはできませんでした

十人に言われても、できませんでした

十人が十人できることを、私一人はできませんでした

これは私の罪でしょうか？

それとも誰かの罪でしょうか？

旅に出て考えます

ひとりで考えたいので電話は切ります

電源を切った。携帯をポストンバッグにしまい、目を閉じた。もう一度バッグから出し、電源を入れた。

遺書みたいになりましたが、命に別状はないのでご心配なく

夢うつつのうちにぼんやりと電車が止まったのを感じた。いつのまにか眠ってしまっていたらしい。目を開けると、窓の外はすっかり田園風景だった。

扉が開くと、じっと座っていられないほど冷たい風が吹き込んだ。乗った時よりずっと冷たい空気だった。ジャンパーを着ずに出てしまったことを後悔した。けれど、より過酷な環境に身を置いたほうが少しでも罪滅ぼしになる気がして、寒さは肌の表面で感じるだけだった。

ちよっとした乗客のしぐさや表情、交わされる会話にも自分自身をあてはめ、後ろ指さされているような錯覚に陥った。ちよっと涙ぐんできた。

かと思うと突然大声で叫び、身の回りの物を手あたり次第引きちぎって投げつけたくなる。

乳母車で泣く赤ちゃんをあやしていた母親が向かいの席から目を丸くしてこっちを見ていた。貴志はこわばった作り笑いを浮かべた。

再び窓の外へ目をうつした。

前方に畑が広がり、その後ろに山がそびえていた。その山がだんだん近くなって線路脇まで迫ってきた。

辺りはますます暗くなり、夕闇に溶け込みゴツゴツした影になった山肌がえんえんと続いた。

電車は途中から各停に変わっていた。止まる駅ごとに何人が降り、乗る人はそれより少なかった。

まだ六時前なのに、みるみる暗くなって窓はもう夜と呼べるほど黒く塗り潰されていた。反対に車内は明るく浮かび上がった。床の傷や凸凹ときれいな座席クッションのコントラストがはっきりして

きた。

車両の端の短い座席からもう一方の端を見渡すと、三人しか乗っていないかった。三人ともスマホを見つめていた。電車の揺れる音しか聞こえない。このままいつまでも乗っていたい心地だった。けれどあと二駅で終点だった。

「終着駅に降りると、まず観光案内所へ向かった。」

「マンガ喫茶とかインターネットカフェはありますか？」

「比較的安い宿はすべて埋まり、空いてる宿は高過ぎた。」

「ここには載ってない小さな旅館もいくつかありますから」

「いや黒ずんだ乳白色のナイロンジャケットを着た小柄な小母さんはこけた頬に弱々しい笑みを浮かべ、すまなそうに言った。」

小母さんの説明によると、この町では山頂付近にメインの観光スポットが集まり、何十軒も旅館が連なっているそうだ。ロープウェイの時刻表を調べてもらおうと、最終は出た後だった。山道を徒歩で登れば小一時間かかるし、それに人気の温泉郷なのでそれほど安い宿は期待できそうになかった。

いくつかあるという駅周辺を探すことにした。もちろん素泊まりのつもりで、観光センターに併設した売店で夕食用の総菜パンとおにぎり、それに替えの下着を買って出かけた。

ロータリーを横切ると、土産物屋の並ぶ通りがあった。夕闇の中、葛餅や柿の葉寿司の旗が明るく照らされていた。ほとんどの店ももう閉まっていて、歩いている客の姿もなかった。まだ開いている店も店先に人はいらず、奥まったガラス障子の向こうに人の動く影が映っていた。

しばらく行くと、小さな神社があった。石の門柱に画数の多い漢字が上から下まで彫ってあった。一番下の「社」しか読めなかった。ふと見るとスニーカーの紐がほどけていたので結んだ。

日頃は毎日目の前を通る近所の神社も素通りする貴志だが、今日はお参りしたい気分だった。

鳥居の下、狛犬と狛犬の間を通ると短い参道があって、突き当りに小規模な拝殿があった。一段だけある石段を登り、ポケットから小銭入れを出した。一円玉が一枚と、あとは五十円玉と百円玉しかなかった。さっき売店で使ったことを後悔した。ためらったあと、五十円玉を一枚賽銭箱に投入した。

正式な参拝方法を聞いたことはあるが、忘れてしまった。黒光りする太い縄を揺ると、多いほうがいいと思って三度手を叩き三度礼をした。

もう一度手を合わせ、目を閉じたままじっとしていた。何か一つ「〇〇しますように」と心の中で唱えようとしたが、何もなかった。

ないと言えは一つもなく、あると言えはすべてなのだった。目を開けるともう一度深々と礼をした。さあ出かけようと振り返った。石段を下りる時、ふと足が止まった。また靴紐がほどけていた。

「やっぱり今日はずいてないな」

また結び直すと、気を取り直して宿を探しに出かけた。

通りを五百メートルほど歩いた地点で立ち止まった貴志は行き場を失くしていた。土産物屋を兼ねた民家の間に旅館の看板を掲げた家は何軒かあった。さつきその中の一軒、あまり立派な門構えでない家の格子戸を開けて呼び鈴を押したのだった。ドスンドスンと重々しい足音が響き、法被を着た厳めしい角張った顔付きの白髪の男が半身だけのぞかせ、

「お泊り？ 一名様？」

はいと答えると、アー満室といってそのまま姿を消した。

二軒目に当たってみる勇気を失くしたまま立ちつくしているのだった。この先は路地も一層暗くなり、どう見ても一般の住居しかなかった。

やはり電車で繁華街のある駅まで引き返そう。

その前に二度と来ることのない街並みを最後によく見ておこう。それにしても寒かった。ホットのお茶を買うため自販機を探すのも兼ね、辺りをグルッと眺め回した。

路地のずっと奥、住宅しかないと思っていた区画の家並みからポツと、四角い電灯が地面すれすれに光っていた。

近づいていっても電灯の中の細い文字は読めなかった。建物の前まで来て、やっと「御宿」と流麗な毛筆体で記してあるのがわかった。

その木造家屋は保護色みだいに闇と一体化していた。玄関の引き戸は一枚の黒い板にみえたが、よく見ると細い格子だった。その横の壁も黒ずんでいたが、上の方に小窓が付いていた。やはり木の格子窓で、すき間からいい匂いの湯気がもれていた。台所にちがいない。

老朽化しているのは確かだが、そのさびれ具合にどこなく上品さ奥床しさが感じられた。たたずまいに好感が持てた。今の貴志の気分にはピッタリだった。

ほとんど迷うことなく貴志は引き戸に手を掛けていた。

玄関の土間に一歩足を踏み入れると、うっすら明るかった。外には灯りが洩れていかなかったのに不思議だった。最新式の照明設備を取り入れているのかもしれない。

その証拠に入ってきた時より、また少し明るくなっていた。はっ

きり見えてきた廊下や壁、柱はどれも建物の外観よりずっと新しくきれいだ。内装だけリフォームしたにちがいない。外見は古いまま残しておくところに趣味の洗練がうかがえた。右側に立派な木のカウンターがあった。上には観光マップやバスツアのパンフレット、ガラスケースに入った日本人形などがのつていたが呼び鈴はなかった。

「すいません！」
貴志の声は他人の声みたいに異様によく響いた。玄関からまっすぐ続く廊下を突き抜け、廊下ごと震わせたみたいだった。

張りがギーッと音をたてて開いた。扉だったことにはじめて気づいた。

和服姿の女性が現れたと思うと、もう貴志の足元の廊下にぺったり腰を落とし、深々とお辞儀していた。

「まあ、お待ちしておりました。遠いところお疲れになったでしょう」

顔を上げると女将らしき女はいった。誰か他の客と間違えてるらしい。

「あの、予約なしですが……」

にっこり笑うと白い歯が光った。後ろでまとめた髪に丸く張り出した額、切れ長の目が浮世絵を想わせた。だが冷たい感じではなく、関西弁とは異なる微かな訛りに親しみが持てた。

「あいにくうちは三部屋しかございませんで、今夜は奥の部屋しか空いておりませんが、そちらでよければ。それに夕食の支度はもう済んでしまいました」

構いません、泊まらせて下さいとって貴志はクツを脱いだ。では宿帳のご記入をといて女将はカウンターの下から古い帳簿を出し、何も書いてない真新しい頁を開いた。貴志は横にあったペン立てからペンを取り、下手な字で住所と名前を書いた。紙は厚い和紙だったが、裏に書かれた文字がうっすら透けていた。墨と毛筆で書いたような太い流れるような文字でぎっしり埋まっていた。

館内の間取りは簡単なものだった。女将について廊下をまっすぐ行くと、右側にはガラス戸の向こうに、暗くてよく見えないが石や植木や小さな池のある庭があった。左側に部屋が三つ並び、一番奥の部屋に通された。

「今お茶をお持ちいたしますね」
女将はもどっていった。

部屋は六畳、畳は張り替えたばかりらしく、うすい黄緑色に輝いていた。なでるとサラサラと指をくすぐった。壁はシミ一つなく真っ白で、それを縁取る棧は栗色にツヤツヤ光っていた。

一枚の壁に羊のような牛のような、恐らくは想像上の生き物の大きなお面が掛けてあった。その向かいには板張りの床の間で、墨絵の掛け軸が下がっていた。襪の多い衣装を身に着け冠を被った古代の女帝のような女が描かれていた。

襪と向き合った壁には上の方に、小さなガラス窓が付いていた。真つ暗なだけで何も見えなかった。たぶん隣の家の壁だろう。畳の上にあるのはちゃぶ台だけだった。その時アレッツと思った。テレビがない。それにフロントにつながらる電話もなかった。

だがそれほど気にならなかった。どうせテレビを観る気分ではない。それに電話する用など何もないだろうし、あったとしても歩いてカウンターまで行けばいい。

純和風旅館というコンセプトを大切にしたら結果なのだと納得した。襪の外で声が出た。開けるとお盆を前に女将が座っていた。

「退屈でしょう？ テレビも何もなくて」

座ったまま膝を滑らせて女将は部屋に入った。

「かえって新鮮です。何でもある所は他にいくらもありませんから」女将は急須から湯呑にお茶を注ぎながら、

「都会の方は皆さんそうおっしゃって下さいます。でも正直申しますと、私はなにもお客様のことをそこまで考えて、このような部屋にしたわけじゃございませんの。実をいうと――」

それから彼女は自分自身のことを語り始めた。長い話だった。だがそれは時計で計れば長いという意味で、いつまでも聞いていられる長さだった。

女将が言うには、子供の頃から親に禁止されたわけではないのに自分からテレビを点けることはほとんどなく、一人の時間はたいてい本を読んで過ごしてきた。

「でも本ばかり読んでるわけじゃなく、お菓子を食べながらポーツとしてる時間も長いの、ハハ」

そこからとりとめもない日常生活での失敗談や旅館業を営む上で苦労話、風変わりな客の逸話などがどこまでも続いた。

話し続けるうち、女将の口調はだんだんカシユアルに、容姿は若返っていくようだった。ある時は快活な少女のように見えた。だが次の瞬間には人生の奥行きを感じさせる明らかに年上の女性にもどった。貴志の目は甘い酒に酔ったように焦点がぼやけてきた。

「すっかり話し込んでしまっただけ。さっきも申しましたが、私やや不眠症気味で明け方まで起きておりますの。あなたももし寝付けないことがございましたら、カウンター横のドアをノックなさってみて。

私ばかり話してしまっただけ、今度はあなたの話を聞かせてちょうだい」おやすみなさいませと、女将は部屋を出て行った。

直後に襖がガラツと開いた。

「言い忘れましたが、朝食は無料ですのでよろしければ。姉が作ったおりますのよ。お陰様で皆さんから美味しいと評判で。姉は体調の波が激しく、作ったり作らなかつたり。でも明日の朝は大丈夫と申しております。どうぞお楽しみにも」

女将が出ていくと、すぐに食事に取いかかった。さっき買ってきた惣菜パンなどを取り出そうとカバンを開けた。中身をのぞいたとたん、急に食欲はしぼんでいった。

すべてを取り出すことにした。取り出さなければいけないと思っただ。エプロン、ゴム手袋、ハサミ、カッター、ガムテープ、ボールペン、修正テープ、バター醬油ふりかけ。

ふりかけは惣菜部の小母さんが美味しいからあげると言ってくれたものだった。まだ関係が良好だった頃の思い出の品だった。

すべてを部屋に備え付けのゴミ箱に投げ入れたいと思った。悦男さんの顔がよぎった。床の間に一つ一つ並べた。わざと目に焼き付けるかのように。だが知らず知らずそちらを見ないようにしていた。とにかく食べることにした。ただ単に習慣としての食事を摂取するということを感じて、味覚はほとんどなかった。

食べ終わると風呂に入ることにした。地下一階にある温泉は源泉かけ流しで、神経痛などに効果があるとちゃぶ台の上の葉には書いてある。神経痛ではないが、一昼夜摺り減らした神経を癒されるかもしれない。洗面所からタオルとバスタオル、歯ブラシ、剃刀を持ち出し、パンが入っていたレジ袋に入れた。カバンからもう一つのレジ袋も取り出した。下着類が入っていた。

床の間の片隅に置かれた浴衣も持った。白と黒の細い縞模様。店のエプロンによく似た柄だった。試しにエプロンと並べてみると、そっくりだった。

部屋を出てトイレの横の階段を中一階程度の高さまで下りていくと、「ゆ」ののれんがみえた。戸を開けると、赤と青ののれんで男湯と女湯に分かれていた。ちょうど風呂上がりの人が出るところだった。

「今晚は」
あいさつした。

旅館の浴衣を着た客はバスタオルを被った頭をかすかに下げた。男としては背の低い僕と同じくらいの身長で、体型的にも男湯女湯どちらから出た人かわからなかった。

客はうつむいたまま脱衣所を出ていこうとした。すれ違う時バスタオルからのぞく濡れた長い髪がタオルごと揺れて生暖かい空気が貴志の顔を覆った。

脱衣カゴに服を入れ、厚くて重い木の扉を開いた。

湯気がもうもうと立ちこめていた。真ん中に大きな湯舟があり、側に蛇口が並んでいた。壁は湯気でよく見えないが、赤い大きな絵を描いたタイル張りだった。戸を閉めて中に入ると、足の裏に凸凹を感じた。小石を敷き詰めてるようだった。すぐ横に積んである木のたらいとイスを一つずつ取り一番近い蛇口の前に座った。蛇口は赤と青の二つあり、ブレンドしてちょうどよい温度にするタイプだった。頭を洗った。身体も洗った。その間ずっと、強い視線を感じていた。湯舟の中からだ。振り向けなかった。出ていこうと立ち上がった時、勇気をこめて振り向いた。何か青黒いものが湯気の向こうにいる。だんだん腹が立ってきた。おびえてる自分にだ。湯船に飛び込みザブザブしぶきをあげて向かった。お湯の抵抗でなかなか前へ進めない。すぐそばまで来た。貴志は笑い出してしまった。本物そっくりのカエルの石像が大きな目を見開いて大きな口から湯を吐き出していた。

部屋にもどると蒲団が敷いてあった。香を焚きしめたみたいない匂いがした。

まだ九時前だった。でもすることがないので、蒲団に入ることにした。タオルを干して、着てきた服をハンガーに掛けた。久しぶりの旅館だった。この前泊まったのはいつだろう？ 中学の修学旅行以来かもしれなかった。楽しい思い出が蘇った。枕を投げたくなった、一人でしても面白くない。蒲団の端からクルクル身体に巻き付けるのも楽しかった。これも一人するのは馬鹿々々しい。

他の楽しい、アパートではできないことを探そう。たとえば蒲団にダイブ！ 実際に蒲団から出て畳の上に立ってみた。床の間に並べた店の備品の数々が目に入った。スーパリーの面々が頭に浮かんだ。悦男さんの顔が浮かんだ。うなだれたまま電気を消した。

蒲団にもどると目を閉じた。真っ暗な中に浮かんでくるのはテトリスのように目まぐるしく移動するいくつもの白いいびつな塊だった。目に力を入れてそれを下に落とそうとする。でもいったん視界から消えたと思ったらまた浮き上がってくるのだった。

そのうち女将の顔が浮かんだ。すべてを打ち明け相談してみたいと思った。素敵なアドバイスをくれそうだった。真夜中にひとり読書にふけっている女将、ドアをノックする音、ハッと振り向く女将、ドアの向こうからする声、ホッとしてドアを開ける女将、二人でこたつに入る、「ビールでもいいかが？」「いえ、酒は飲みません」「では紅茶にいたしましょう」熱い紅茶を飲みながら、すっかり話に夢中

になり、やがて……。

さあそろそろ起きて会いに行こう。何度も蒲団から出ようと膝を立てては崩しているうち、だんだん手足は重くなっていった。

廊下を走る音で何度か目を覚ましかけた。ドタドタとがさつな足音が廊下を伝い、隣の部屋の襖を乱暴に開け閉めする音が続いた。子供でもいるのだろうか？

それからまた襖をガラツと開ける音、廊下を走り回る音。

さすがに文句を言いに行こうと思った。でも身体は深い池の底に沈んだように動かない。

廊下をドタドタ往復していた足音が止んだ。ちょうど貴志の部屋の前だった。廊下の方から襖ごしに物凄い視線を感じる。

襖が勢いよく開き、壁にぶちあたる音がした。

突然、閉じた瞼の中が真っ白になった。薄目を開けた。眩しい夏の真昼みたいな光が差し込んできた。

はつきり目を開けると、本当に真っ青な空が広がり、太陽がギラギラ照りつけていた。

顔の上に手をかざそうとした。グツと腕がひきつり、肩に鈍い痛みが走った。首をひねり、左手を見た。手首の周りに錆びた金属の太い環が嵌まっていた。その環が古びた木の板に埋まり、動かそうとしてもびくともしない。

首を回した。右手もそうだった。首を起こすと両足首も板につながれていた。白黒の縦縞の服を着ていた。つまり旅館の浴衣を着たまま炎天下、戸板上に大の字で張り付けになって寝かされた自分を見回しているのだった。

下のほうでガヤガヤと大勢の話し声がきこえる。何を言っているのか聞き取れないが、レース前の競馬場の歓声みたいな熱気と興奮が伝わってくる。

声が聞こえてくる位置から考えて、貴志の横たわる板はかなり高い場所にあるらしかった。実際、板の延長線上に地面は見えず、こもり繁ったいくつかの大木は下の方が見切れていた。建物らしいものは一つも見えず、木々の重なるの向こうにはゆるやかな起伏の山並みが半分雲に隠れていた。

ドンドンと太鼓を打ち鳴らす音が遠くのほうでした。ウォーッというどよめきが同じ方角から洩れ、波のように伝わってだんだんこちらまで近づいてきた。

ふと頭のほうから、それとは別の沈んだ話し声がきこえた。そちらに首は回らないので、目だけ動かして見ようとした。

それほど広くない板の端に、足が見えた。草履をはき、脛まである長い足袋のうえに縄がグルグル巻いてあった。

今度は反対側から声がした。また無理な姿勢から何とかそちらを見ようとした。似たような草履と足袋をはいた足が見えた。二人とも膝を直角に曲げていることから、イヌに座ってるようだった。二人もガタツと重い音がして、貴志の身体は揺れた。頭が少し持ち上がった。よく見ると、貴志の寝ている畳一畳分ほどは周りの板より一段高くなっていて、それが頭の方からだんだんせり上がり、直角に傾いていった。

どうとう貴志は板ごと完全に立ち上がっていた。眼下の景色が見渡せた。

時代劇でしか見たことのない服装や髪型をした老若男女が、パツと見たところ百人以上集まっていた。まるで土の中から生まれ出たばかりか土に帰る寸前みたいに、薄汚れた着物を着、薄汚れた顔を寄せ合っていた。そこだけ涙を溜めたみたいにキラキラ光る目がいっせいに貴志に注がれている。

太鼓の音が近づいてきた。顔という顔が弾かれたようにそちらを向いた。サーッと人だかりが二つに割れ、これも時代劇でしか見ない駕籠かきが駕籠を担いできた。ちょうど座椅子のような形の駕籠に丸太を二本通し、二人ずつ四人で担いでいた。

歓声が高まり、それに応えるよう駕籠かき人足たちのフットワークがリズムミカルになった。そこからコマ落としのようにすべての動きが速くなった。

襲の多いきらびやかな色彩の着物を着た女が駕籠から下りた。みるみる近づき、いつのまに掛けたのか足場の端から伸びた梯子を滑るように登ってきた。

背の低い女だった。さっき遠くで見た時と変わらない背丈に見えた。だががっしりした体格だった。手にキラキラ光る細長いものを持っていた。

髻を結った髪、エラの張った四角い輪郭がわかるだけで、女の顔はそこだけ日陰になったようにぼんやりしていた。その顔がだんだんはつきりしてきた。剃り落とした眉、細い吊り上がった眼、その眼がこれでもかというくらい濃いアイメイクで異様に強調されている。

安全に横断歩道を渡るみたいに女の腕がまっすぐ上がっていた。何か光った。女の手の先で太い刀の刃が真っ白に日光を反射していた。太鼓の音がだんだん小刻みに間隔を詰めていく。

貴志の足元に浴衣の紐が落ちていた。毛深い男の手が左右から貴志の浴衣の衿を開いた。女の唇の端が持ち上がり、細い眼がギュッと見開いて血走った白目だけになった。

うなりを上げて振り落とされた刃は真一文字に貴志の腹を裂いた。自分の叫び声で目が覚めた。

反射的に起き上がり、その勢いそのまま蒲団の上に立ち上がって電気を点けた。
 心臓がドンドンと胸の壁を叩いていた。こめかみに濁流が走っていた。
 喉がカラカラだった。ちゃぶ台の上の急須から冷めたお茶を注いでひと息に飲んだ。
 『しかし怖い夢だったなあ。しかも時代劇のスクリーンの中に飛び込んだみたいになりアルだったなあ』
 枕元の携帯で時刻を調べようと思った。だが携帯の画面を見るのさえ恐ろしかった。
 今こそ女将を訪ねてみよう。けれど全身汗だくだった。浴衣の前ははだけ、あちこちに汗が染みていた。ひと風呂浴びて来ようか？ 出来るわけがない。
 浴衣がもう一枚あるのを思い出した。着替えだけでもしておこう。着ていた浴衣を脱いだ。
 大声を出して、後ろに飛び退いた。だが逃げられなかった。なぜならそれは貴志の身体に刻まれていたから。
 へその上にスーツと薄く、何かで切ったような跡がうっすら血を滲ませ、真っ直ぐに走っていた。
 さあ、もう迷うことはない。女将の部屋へ駆け込もう。貴志は襖に手を掛けた。
 しばらくじっとしたあと、部屋の真ん中にもどり蒲団の上に座り込んだ。
 もしこれが心霊現象だとして、そのことを女将に告げたとしたら、旅館への中傷と受け取られないだろうか？ かと行ってこの出来事をスルーしてとりとめない会話を楽しむなんてとてもできそうにない。
 結局朝まで一睡もできないだろうが、このまま部屋でじっと耐えるしかなかった。忘れるために、さっきまで目を背けていたスパーでのトラブルを逐一細部まで思い出すことにした。だが始めてみると、はるか遠くの出来事だったかのよう何の反省も謝罪の念も起きることなく、事実あったことの羅列としてすぐに終わってしまった。
 うのだった。
 空の色がかすかに薄れかけた頃、やっと夜が明けたひと安心のせいでストンと眠りに落ちてしまった。

小鳥がさえずっていた。どこかの家からラジオ体操の曲が流れていた。通りに面した外の方から、子供たちが笑いながら走っていく声がきこえた。さわやかな朝だ。
 目を開けると、小窓いっぱい金色の日差しがあふれ、帯状に伸

びて畳に四角い日溜りを作っていた。

携帯を見ると、七時過ぎだった。朝食は七時半までだ。急いで蒲団を畳み、浴衣を脱いだ。

へその上を見た。傷はほとんど消えかけていた。血の滲んでいたのがウソのように、見えるか見えないかの薄いピンク色のシワでしかなかった。

気のせいだったのか。もしかすると悪夢から覚めたあと、腹の傷跡を発見する、そこまでがまたもう一つの夢だったのかもしれない。

襖の外から、

「お目覚めでしょうか？ 朝食の準備が出来ております」

貴志はあわてて服を着た。

襖を開けると、

「お休みになれましたか？ 一度声をお掛けしたのですが、お邪魔ではなかったかと」

そんなことありません、すぐに朝食をいただきますと言った。

女将は例の人懐っこい笑顔を見せると、ただいまお持ちしますと、いってもどった。

まもなくお膳が運ばれてきた。御飯と味噌汁、小鉢四品だった。小鉢は納豆や海苔や温泉卵ではなく、どれもみないかにも凝った煮物だった。旨かった。ちょっと黒っぽく色合いはよくなかったが、味が染みてコクがあった。どれも食べたことのない料理で、肉なのか魚なのか野菜なのかさえはつきりしないが、とにかく旨かった。貴志は貪るように頬張った。

食べ終えると、チェックアウトの支度をした。床の間からスーパの備品を一つ一つカバンに入れた。その横に畳んで置いていた浴衣を蒲団の上に載せた。

「お済みになりましたか？」

廊下で女将の声がした。ごちそうさまでしたと言って襖を開け、お膳をちゃぶ台から持ち上げた。

「お口に合いましたか？」

「とてもとても美味しかったです。今まで食べた朝食の中で一番と言えます」

「まあ、姉も喜びますわ。今あいさつに参らせますので、少しお待ちを」

女将はお膳を廊下に出すと、お辞儀して襖を閉めた。廊下を小走りにもどる足音がきこえた。

女将の姉はなかなか来なかった。ちゃぶ台の上の列車時刻表をみると、次の発車まであと十分を切っていた。

そうだ、チェックアウトがてらこちらから台所へ出向いてあいさ

つしよう。

「そう思って立ち上がった。」

「失礼します」

廊下で声がした。

ハイ、どうぞ。襖が静かに開いた。

地味なつなぎのワンピースを着た女性が廊下に額が付くくらい深々とおじぎして座っていた。貴志も畳の上に座り直した。

「ああ、お姉さんですか。ほんとに美味しかったです」

女将の姉がゆっくり顔を上げた。

吊り上がった眼、濃すぎるアイシャドー、白目が血走っている。

貴志はガクガクと畳に両手をついた。立ち上がろうとしたのだが、全身から血の気がうせ、前につんのめった。叫び出しそうな声はなんとかおさえた。いや、あまりに大声で叫んだため、自分では聞こえなかったのかもしれない。

女将の姉は唇の両端を曲げ、にっこり笑って、貴志を見上げていた。

駅に着くと、踏切音が鳴り列車はまもなく到着予定だった。

「どうやって旅館を出てここまでたどり着いたのか全く覚えていない。覚えているのはサイフから札を驚掴みにしてカウンターに投げたことだけだった。」

カバンを開けて、サイフを出した。千円札一枚しかなかった。

貴志はカバンを開けたまま、魂が抜けたように固まってしまった。

「何かがいつもちぐはぐだった。人生の大切な場面場でポタンの掛け違いをずっと僕はしてきた」

宿賃を払い過ぎたことではなかった。明日から食費にも窮するころなどではなかった。

貴志の目はその向こうにあるもの、カバンの奥にのぞくものに釘付けにされていた。

店のエプロンを取り出した。いや、エプロンとそっくりな柄の布を取り出した。広げてみる。旅館の浴衣だった。

ホームのベルが鳴っていた。

「お客さん、乗るんですか？ お急ぎください」

あわてて券売機に千円札を入れた。

置いてきてしまえ。どうせ返しに行けないんだろう？

一番安い値段を押しそうとした。

「もう出ますよ！ 次は三十分後ですよ！」

返却しバーを回した。ジーッと音がして、千円札が舌を出した。

土産物屋の通りを歩いている間じゅう、あの旅館はもうないか、

最初からなかったのかもしれないと思った。いや、そうであってほしかった。

旅館と民宿の連なる路地がとぎれ、十字路をはさんで民家の集まる一角がみえた。旅館のあった辺りを目で追った。昨日の夕方見た四角い看板は、やはりもうなかった。

とりあえず前まで行ってみることにしよう。足はひとりでに遅くなった。手前まで来てほとんど止まりかけた。あと一歩あと一歩と険しい山道みたいに進んだ。

店はまだあった。古いがどことなく風格のあるたたずまい。玄関の格子戸の向こうが真っ暗なのも昨晩と同じだ。

台所の格子窓も真っ暗だった。四つの目がすき間の闇からのぞいてる気がした。ぎゅっと目を閉じ、首を振った。

格子戸の取っ手に手を掛けた。五本の指はブルブル震えていた。もう一度目をつぶり、思いきり引いた。戸の木組みが粉々に砕けるような音を立てた。

土間に足を踏み入れた。声も出なかった。

昨日は張り替えたばかりのように薄茶色に光り、新鮮に香っていた壁も床も、まるで全焼した跡みたいに一面真っ黒にただれていた。

廊下の向こうから、ただならぬ寒気の帯のようなものがブルブル這うようにこっちに押し寄せてくる。

「気のせいだと自分に言い聞かせた。その塊を押し返すように、」

「浴衣を返しに来ました！　かわりにエプロンを返してください！」
貴志の声じゃないみたい。異様に大きく、暗い廊下にこだました。ちよっと指で押さえただけで崩れそうな床を貴志は土足で踏みしめた。